

はヨルダンに派遣されました。今回の応答は前々回、前回と同じでした。

②水は両側に分かれ(7~8)「預言者のともがらのうち五十人が行って、遠く離れて立っていた。ふたりがヨルダン川のほとりに立ったとき、エリヤは自分の外套を取り、それを丸めて水を打った。すると、水は両側に分かれた。それでふたりはかわいた土の上を渡った。」二人がヨルダン川のほとりに立つと、エリヤは自分の外套を丸めて、水を打ちました。すると、モーセが杖を掲げて海を開いた時のように、川の水は両側に分かれ道ができました。二人はそこを渡りました。預言者の五十人はその遠くから様子を見ていました。結果として証人となりました。

③あなたの霊の(9~10)「渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。『私はあなたのために何をしようか。私があるところから取り去られる前に、求めなさい。』すると、エリシャは、『では、あなたの霊の、二つの分け前が私のものになりますように。』と言った。エリヤは言った。『あなたはむずかしい注文をする。しかし、私があるところから取り去られるとき、あなたが私を見ることができれば、そのことがあなたにかなえられよう。できないなら、そうはならない。』」川を渡り終えた時、エリヤはエリシャに「願うことがあれば求めよ、取り去られる前に」と伝えます。エリシャは大胆に、霊的賜物を分けてもらいたいと願います。するとエリヤは、「主が賜るものだから、難しい願いだが」といいつつ、「取り去られる場面をエリシャがいるならば、それは実現する」と述べます。エリヤは主からそうした導きを受け取ったのでしょう。

3. エリヤは天に(11~14節)

①火の戦車と火の馬(11)「こうして、彼らがなお進みながら話していると、なんと、一台の火の戦車と火の馬とが現れ、このふたりの間を分け隔て、エリヤは、たつまきに乗って天へ上って行った。」彼らがさらに進むと、突然、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、エリヤとエリシャの間を分け、同時にエリヤはたつまきに乗って、天に上って行ったのです。これをエリヤの死と記されず、彼は一瞬にして天に移されて行ったのです。

②着物を引き裂き(12)「エリシャはこれを見て、『わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち』と叫んでいたが、彼はもう見えなかった。そこで、彼は自分の着物をつかみ、それを二つに引き裂いた。」そこに居合わせたエリシャは「わが父。わが父。戦車と騎兵たち」と叫びました。しかし、どこを見回しても、エリヤの姿はありません。彼は着物を二つに裂きました。それは、悲しみや叫びの表現でもあります。

③賜物の引継ぎ(13~14)「それから、彼はエリヤの身から落ちた外套を

拾いあげ、引き返してヨルダン川の岸辺に立った。彼はエリヤの身から落ちた外套を取って水を打ち、『エリヤの神、主はどこにおられるのですか。』と言った。彼も水を打つと、水が両側に分かれたので、エリシャは渡った。」エリシャはエリヤの残した外套を取り、水を打ちました。彼はエリヤが慕い求めた神、主に呼びかけます。そして、エリヤがなしたように、川の水を打ちました。すると、水は両側に分かれそこを歩きました。預言されたように、エリヤの賜物はエリシャに分けられたのです。

《結論》先々週の「教会の交わり」の最後のところで将来のある若いバリトン歌手の召天の式で、お父さんがヨブ記 1:21「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」を引用して冷静に挨拶されたことと記しました。実を言うとこれには続きがあります。その父親は牧師の了承を得て、花でいっぱい飾られた棺を前にして、大きな声で「直輝！ ナオキ！ なおき！」と叫ばれたというのです。御言葉を受取っていった信仰者は、父親として共に歩んだ息子との別れを悲しんだのです。参列者はもう一つの感動を得たと言います。

今朝、お読みしましたエリヤの最期に際しては、愛弟子ともいえるエリシ

ヤは、主がエリヤを近々に取り上げられるということを知ら

されていても、い

ざその時を迎えた直後には、自分の着物を二つに引き裂いて、悲し

みをあ

らわしたのです。彼は、「ここにとどまっていなさい」とエリヤに

言われても

ベテル、エリコ、ヨルダンと一時も離れないでついて行きました。おそらく、その一挙手一投足も見逃さないようにしていたのだと思います。ところが、その時は突然としてやってきました。火の戦車と火の馬が現れたかと思うと、二人の間を分かち、エリヤはたちまちにして、たつまきに乗って天の方向に移されて行ったのです。衝撃的な瞬間でした。

こうした出来事は聖書の中でも稀です。創世記 5:24 に出て来るエノクは「神が彼を取られたので、彼はいなくなった」とあります。これをヘブル書では 11:5 で「信仰によって、エノクは死を見ることの内容に移されました。神に移されて、見えなくなりました。」と記されています。また、主イエス・キリストの場合は特別ですが、40 日の間、復活の命を人々の前に証しされた後に、「聖霊が臨まれる時、あなたがたは力を受けます」と述べられて、弟子達が見ている間に、「上げられて、雲に包まれて、見えなくなられた」とありますが、そのように昇天されたのです。

ですから、エリヤが天に移されていった出来事は「死ん

だ」とは表現されていないのです。とはいえ、地上においてはもはや会えなくなったのは間違いのないことで、後継者エリヤが悲しんだのも理解できます。彼にとっては、エリヤを通して約束された賜物の引継ぎが、与えられたことを確認できたことは何よりも喜ばしいことだったと思われまます。

讚美歌 320 は愛唱讚美歌の一つです。ヤコブの生涯をたどりつつ、私たちの人生が語られ、どの節にも最後に「主よ。みもとに近づかん」とあります。そして、5 番には「うつし世をば、離れて、天（あま）がける日、来たらば、いよよ近く、みもとにゆき、主の御顔を仰ぎ見ん」とあります。私たちの最期はエリヤのようなものではないでしょう。自宅かもしれません。病院かもしれません。あるいはまたその他の場所かもしれません。いずれにせよ、この地上での命を終える時は、天（あま）がける日であります。誰にもやがてやって来ます。エリヤの生涯については先週振り返りましたように、数々の恵みが注がれました。私たちの人生にも、主なる神さまはたくさんの恵みを与えてくださいました。そして、まだまだ備えてくださっています。天がける日まで、主をどこまでも仰ぎ、希望をもって歩いて行こうではありませんか。